

日本占領下インドネシアで語られた 「大東亜共栄圏文化」の理念

日刊紙「アジア・ラヤ」上の日本徴用文化人と現地作家の論説を中心に
姫本由美子（アジア地域研究所特任研究員）

上田：それでは続けまして、姫本由美子さんの方から講演をお願いしたいと思います。姫本さんは、公益財団法人トヨタ財団の方で働いておられますが、そのかわりで早稲田大学の大学院アジア太平洋研究科の博士課程後期課程で学ばれ満期退学されています。それで現在、本学、立教大学アジア地域研究所の特任研究員という形で研究を進めております。著作と致しましては、『日本占領期のインドネシア文学』など論考を多数執筆されております。それでは、姫本さんよろしく申し上げます。

姫本：今日は、「日本占領下インドネシアで語られた「大東亜共栄圏」の文化理念 一日刊紙「アジア・ラヤ」にかかわった日本徴用文化人と現地作家の論考を中心に」というテーマでお話をさせていただきます。

はじめに

最初に、このテーマを扱う意義について、簡単に説明させていただこうと思います。今日は、第二次世界大戦一当時日本では「大東亜戦争」と呼んでおりましたがその戦争の時代が対象ですが、すでに第一次世界大戦以降、戦争を行うにあたっては、軍事だけでなく経済、思想、宣伝なども含めた「総力戦」の形となっております。したがって、戦争における一般民衆に対する宣伝や文化工作などの重要性が認識され始めていました。近年に至っては、外交政策におけるソフト・パワーという概念でその重要性が指摘されています。日本も「大東亜戦争」を戦うにあたって陸軍が宣伝班を設置し、宣撫活動、文化工作を行いました。しかし、「大東亜戦争」で日本が占領した南洋地域の研究は、政治、経済が中心で、文化分野は等閑視されてきたため、その宣伝班が行った活動の実態は十分に明らかにされていません。

先行研究では、たとえば、日本に占領されたインドネシアで現地の作家が執筆した文学作品は、日本の宣撫活動に従った戦意高揚のためのプロパガンダ作品であったとされています。その宣撫活動を行った宣伝班の活動についても、その宣伝班で活動した日本の徴用文化人が当時について書き残したものに基いた研究はありますが、現地のインドネシア人が彼らの宣撫活動をどのように受けとめて自分たちの活動を展開していったかについての視点が欠けています。そのため、徴用文化人がその宣撫活動をどのようにとらえていたかという、日本側の視点からのみの研究が中心となっています。

一方近年、日本の宣伝班員とかかわったインドネシア人作家が、必ずしも日本の宣伝工作に全面的にしたがって執筆活動を行っていたのではないのではないか、という問題提起を行っている研究者もいます。つまり、従来は日本占領軍の文化工作に従ってインドネシア人は文化活動を行ってきたと考えられてきましたが、近年、社会学の理論を借りれば、エイジェンシーとしてのインドネシア人の活動に注目した研究の必要性が指摘されるようになってきています。

本発表では、以上のような問題意識に基づいて、日本占領下のインドネシアで宣伝班の班員であった日本の徴用文化人と現地インドネシア人が創刊したインドネシア語日刊紙「アジア・ラヤ」—大アジアという意味ですが—を取り上げ、その日刊紙刊行にあたって、両者がどのようにかわりあい、また同誌において「大東亜共栄圏」の文化についてのどのような論考を発信したのかを検証し、それによって、日本占領下での文化活動の実態

の一部を明らかにしたいと思います。先程指摘したエイジェンシーとしてのインドネシア人による活動との関連では、「アジア・ラヤ」においてインドネシア人作家のサヌシ・パネが「芸術のための芸術」と主張していることは、インドネシア人作家が戦意高揚のプロパガンダ作品を作っていたという従来の研究の見解とは異なっているのではないかと、2012年にインドネシア人研究者が問題提起した課題に答えることにつながると思います。

そこで、日本占領下のインドネシアで刊行された「アジア・ラヤ」についての考察を行う前に、初めに日本政府の「大東亜共栄圏」についての見解、そしてインドネシアを占領した日本陸軍第十六軍の中に設置された宣伝班のその部隊内での位置づけ、役割、特徴について押さえておきたいと思います。

1. 日本政府の「大東亜共栄圏」に関する見解

日本政府の「大東亜共栄圏」の構想については、すでに多くの研究がなされていて皆さんもご存じのことと思いますので、時間の関係もあり、ここでは本発表に関連したポイントだけを押さえさせていただきます（資料1）。日本政府が初めて「大東亜共栄圏」構想に触れたのは、1940年8月の第2次近衛内閣によって発表された基本国策要綱「大東亜新秩序の建設」においてです。そこで「自存自衛」と「大東亜新秩序建設」との2つの戦争目的が掲げられたことによって、1941年12月の「大東亜戦争」開戦時に至ってもその2つの戦争目的の間で揺れ動くこととなり、南洋を占領した現地軍は一貫した作戦計画を立て実施することができませんでした。その結果、1942年3月初旬にインドネシアを占領した陸軍部隊のなかでも「大東亜共栄圏」の解釈、具体的にはインドネシアの独立をどう考えるか、をめぐって混乱が生じます。1941年11月20日に発表された「南方占領地行政実施要領」では、「原住民」の独立運動は過早に誘発することを避けることとなっていました。が、過早とはどれくらいの期間を指すのかも分からない状況でした。

資料1 日本政府の見解（概略）

1940年8月1日 基本国策要綱「大東亜新秩序の建設」

- ・「東亜経済圏」に不足する資源の獲得
- ・大東亜地域の諸民族を解放し、日本が指導して共存共栄の関係を構築

1941年11月20日「南方占領地行政実施要領」

- ・国防資源の獲得
- ・「原住民」の独立運動は過早に誘発することを避ける

1941年12月 開戦時の戦争目的の不統一

- ・10日 大本営政府連絡会議「自存自衛」←（海軍省）
- ・12日 情報局発表「大東亜新秩序建設」←（陸軍省）

1942年3月14日「占領地軍政処理要綱」

- ・「原住民」の風俗、習慣、宗教にさしあたり干渉しない
- ・欧米教育の是正
- ・日本語、日本文化の普及に努める

1942年2月21日 大東亜建設審議会設置

1942年5月4日 基本答申「大東亜建設に関する基礎要件」

「大東亜建設に処する文教政策答申」

- ・欧米優越観念の排除
- ・圏域文化は、諸民族の文化の特殊性を尊重しつつ日本文化を中心に統一
- ・現地の固有語は尊重するが、大東亜の共通語としての日本語の普及
- ・日本文化を顕揚し、内地から派遣する研究者等と現地有識者と共に文化の向上を促進し渾然たる「大東亜」文化を培う

日本政府は、1942年3月14日に「占領地軍政処理要綱」を發表し、3つの方針を南洋の占領軍に示しますが、インドネシアでは日本陸軍は3月7日にすでに布告第1号を發表し、軍政を敷いていました。また、大東亜共栄圏の建設については、1942年2月21日になってやっと大東亜建設審議会が設置され、5月4日に「大東亜建設に関する基礎要件」として基本答申が出されました。その文教政策では、欧米優越観念の排除—あくまでも優越観念の排除でして欧米の排除ではありません—を含む、4つの方針が示されました。開戦後半年も経って方針が示されたのですが、建設されるべき大東亜圏内での「大東亜」文化の具体的な内容への言及はありませんでした。

2. ジャワ占領軍（陸軍第十六軍）の宣撫活動

日本陸軍は、1941年9月に南洋への侵攻を行う予定の部隊の中に宣伝班を設置しました。従来の報道班は、戦場の後方で戦況報告を行うことが主な任務であったのに対し、宣伝班は前線で宣撫活動を行うことが期待されました。これは、満州事変に端を発する日中戦争において強い抗日運動に直面していたため、南洋に侵攻するにあたって同地の人々の協力を得るためには宣撫活動が必要であるとの認識を陸軍報道班が持っていたからです。同班が参謀本部第8課（謀略）に相談してナチス・ドイツのPK（Propaganda Korps）に似せた宣伝隊の設置を計画しました。しかし宣伝班の設置には、戦争を思想戦や文化戦と捉えることは邪道であるとの考えがあり、陸軍内では強い反対がありました。参謀本部の内部や陸軍省を説得して設置にこぎつけたのですが、ジャワに侵攻し軍政を敷く予定であった陸軍第十六軍の宣伝班長には文化に造詣が深い陸軍では変わり者として出世が遅れ、当時中国の辺境の部隊を任されていた町田敬二中佐が任命されました。宣伝班員にとっては、町田は軍隊上層部に対して交渉能力のない人物で頼りがいがなかったようです。また彼は宣伝班員に対して自由放任主義を取ったと自認していますが、そもそも宣伝班がどのような活動を行うのか、陸軍内にも具体的な計画が存在しなかったし、宣伝班の名称がジャワ侵攻後1年もたたない間に2度も変更されていることは、その役割がしっかり定まっていなかったことを示していると言えます。

宣伝班の班員約400名のうち約250名は将兵、そして残りのおよそ150名は1938年4月に制定された国家総動員法に基づいて翌年定められた徴用令によって徴用された多様な職業と思想を持った当代一流の文化人や宣撫専門家でした。しかしその人選は、参謀部を中心に、大宅壮一（満鉄映画協会）と中山正男（陸軍画報）という民間人に相談して短期間に行われ、南洋に侵攻したほかの3部隊も同様に文化人を徴用したので、南洋全体で600人近い文化人の同時期における徴用には無理もありました。また第十六軍の宣伝班は、ジャワへの侵攻をインドネシア人に受け入れてもらうため、日本の海外ラジオ放送でインドネシアの独立を鼓舞する民族歌を盛んに放送しました。

第十六軍は1942年3月1日にジャワへ侵攻し、植民地宗主国のオランダを約1週間で降伏させました。3月7日に「軍政布告第1号」を公布し、日本とインドネシアは同族同祖であり、大東亜共同防衛と現地住民の福祉向上と共存共栄を図ることを示しました。そしてその直後からインドネシアの民族歌と民族旗の使用を取り締まり、それを禁止する布告はあとから出されたため、その措置が徴用文化人にも徹底されていませんでした。しかも日本からはまだ民族歌が海外放送されていたため、インドネシアの独立をめぐる日本軍の政策の不徹底さ、そして徴用文化人の困惑ぶりがうかがえます。

そのような状況下の3月27日、宣伝班とインドネシア文化人との初会合がジャカルタの芸術会館で開かれます。60人近くが出席したインドネシア文化人の最大の関心事は、日本がインドネシアの独立を認めてくれるかどうかでした。宣伝班を代表して、徴用作家の富沢有為男が講演を行います。インドネシアの独立運動に対しては過早に誘発することを避けることとしていた日本の方針を了解していた富沢は、アジア解放のために戦っている日本の独断的な政治をインドネシア人は辛抱しなければならないと演説しました。それを聞いて

てインドネシア文化人は非常に落胆し失望しました。この会合結果に対する日本人の徴用文化人の反応は、当時の日本の新聞などで報道されたものによると、富沢の話は当然のことであり、アジアの民族が共存共栄する「大東亜共栄圏」の中で各民族の独立は必要ないというものでした。しかし、のちに彼らが執筆した文章なども検討すると、それは、彼らがインドネシア侵攻前に予想していたことと異なり、インドネシアに哲学者などの知識人が多く存在し民度が高いことに対して衝撃を受けたこと、また日本の方針に対する現地知識人の落胆の大きさに対して困惑する自分たちの姿を隠ぺいする虚勢の発言であったと理解できます。

4月に入ると宣伝班による「大東亜共栄圏」建設に向けた三A運動（「アジアの光日本、アジアの母体日本、アジアの指導者日本」）が展開されますが、スローガン倒れて9月には取りやめとなります。またその他に、敵性文書の没収、日本語の教科書の作成、日本文化の紹介などが行われますが、次にも述べるように、文化人たちは各自勝手に行動し、反目し合い、また憲兵隊等と衝突を繰り返すようになります。

以上をまとめますと、日本がインドネシアへ侵攻し占領するにあたって宣伝班は部隊の中では必ずしも重要視されていなかったこと、日本の政府、ジャワ占領軍、その中の宣伝班の間の意思疎通が十分行われていなかったこと、また「大東亜共栄圏」においてインドネシアの独立は当分認められないことをインドネシア文化人に対して詭弁を弄して発信は行ったが、その「大東亜共栄圏」とはどのようなものであるかという内容については指導者としての日本ばかりが強調されるスローガン倒れに終わったと言えます。また宣伝班の文化人は、インドネシアにも文化人が存在したこと、そして彼らの独立に対する強い願望を目の当たりにして困惑していた様子が見えます。

3. 日刊紙「アジア・ラヤ」（大アジア）について

3月末から、前述の宣伝班員富沢有為男、それに浅野晃などが加わって、インドネシア語の新聞を宣伝班が発行する計画が持ち上がります。その新聞の名称は大アジアという意味の「アジア・ラヤ」となります。その刊行の目的は、富沢によると、日本の考えをインドネシアに正しく伝えるためであり、浅野によると、抽象的な三A運動の精神をより分かりやすく説明する必要が出てきたためでした。日本軍は、オランダ語新聞を発禁し、インドネシア語新聞、華僑新聞、地方語新聞などを順次統廃合していき、その過程で「アジア・ラヤ」は現地語新聞の中核をなすこととなります。

編集委員長には、本日の発表者の一人でいらっしゃる後藤先生がご著書で詳しく紹介されている市来竜夫が就任します。彼は、戦前インドネシアの日蘭商業新聞で記者として活躍し、インドネシア民族主義に強い共感を抱いていました。しかし彼は、個人プレーを好んだこともあり、早い段階で図書出版活動などを行う公営のバライ・プスタカに行ってしまう、編集委員長とは名ばかりのものでした。論説委員には富沢有為男、浅野晃、この二人についてはあとで述べますが、それに清水宣夫が就きました。清水宣夫は、仲小路彰が率いる日本を中心としたアジア太平洋におけるスメラミクニの復興を唱える「スメラ学」塾の指導者で、浅野晃に多少影響を与えた存在であったと考えられますが、ごく初期の段階のみ「アジア・ラヤ」に関与していたと思われます。

市来竜夫が紹介したインドネシア人も重要な位置を占めます。名誉委員には民族政党パリンドラ（Parindra）党指導者のスカルジョ・ウィルヨプラノト、彼は富沢らが日本に帰還した後の12月から編集委員長となります。文化部編集委員長には当時インドネシアではすでに名の知れた詩人であったサヌシ・パネが就きます。彼は7月3日までその地位にあり、文化欄に多くの論考を執筆します。彼が去った後もしばらくは彼の論考の掲載は続きますが、文化部編集委員長のポストはなくなります。

日本とインドネシアの「アジア・ラヤ」に関係した以上の文化人は、スカルジョが「裸

の家」と名付けた富沢や浅野晃の住んでいた家で、毎晩のように議論して新聞の刊行準備を行います。浅野は、自分の意見にインドネシア側が最終的には同調してくれたと記していますが、のちに述べるように実際は必ずしもそうではなかったようです。この日本人とインドネシア人とのコミュニケーションの通訳、そして日本語原稿のインドネシア語への翻訳は、戦前の現地滞在経験が長く、インドネシアの民族主義学校タマン・シスワの卒業生でもあった実直な中谷義男が担当しました。双方の社会や文化に通じた中谷は、日本側及びインドネシア側双方から信頼を寄せられていましたし、その実直な性格から通訳・翻訳の内容が忠実で正確であることは、日本語新聞「うなばら」と「アジア・ラヤ」相互で翻訳・掲載された記事を比較してもわかります。

検閲は、宣伝班自体が事前検閲を行い、市来竜夫の友人でインドネシア人のエルカナ・トビンが担当していましたが、1943年4月には第十六軍直属として設置された軍検閲班が担当することになります。

当初の刊行資金は、軍からのものでなく、華僑の寄付や広告料で賄われ、1942年4月29日の創刊以降、発行部数は約23,000部に達します。オランダ植民地時代のインドネシア語新聞、たとえばプマンダガンが7,000部、オランダ語新聞のジャワ・ボーデが15,000部であることに鑑みると、読者獲得に成功したと言えます。同盟新聞にいた松本重治は1943年に、「アジア・ラヤ」を南洋で最も尤もなる新聞であるとし、当時編集委員長となっていたスカルジョを高く評価しています。また同紙は文化人が中心となって創刊されたため、当初、日本人とインドネシア人双方による「大東亜共栄圏」の文化やその圏内にあるインドネシアの文化に関する論考が多く掲載されました。さらに日本や世界の情勢についても多く発信され、インドネシア人にとって内外に関する重要な情報源となりました。

ただし発行準備中に、宣伝班の中でも極端な皇道派の「スメラ学」塾関係者から横やりが入り、富沢らは対応に苦慮します。それが論説委員に同塾の指導者の清水宣夫が加わった理由なのではないでしょうか。同氏の「原住民よ皇民たれ！」（うなばら）は「アジア・ラヤ」にも掲載されますが、それ以降の彼の影響は認められません。また、清水宣夫の影響に加えて、次に述べるように、富沢や浅野も国粹主義的考えを持っていましたので、天長節（天皇誕生日）に刊行された創刊号には「天皇」の言葉が80か所盛り込まれたのですが、それを今度は憲兵隊が不敬罪にあたりと問題視したため、翌日の4月30日から「天皇」という言葉は減らし、その代わりに新聞発行の日付は皇紀を用いるようになりました。

以上、まとめますと、日本の徴用作家富沢有為男や浅野晃とインドネシア人との共同作業で「アジア・ラヤ」は創刊されたのですが、創刊にあたって障害となったことは、日本側内部に起因するものでした。つまり、日本占領軍の中に反目や意思統一に欠ける場所があったことによります。しかし日本側各方面からの了解が得られると、検閲は宣伝班内での自己検閲であり、民族主義者市来が信頼を置いていたインドネシア人が検閲を行ったため、比較的自由に論考が執筆されました。また、文化部の編集委員長のポストを設けたことに示されるように、1943年初めまで文化欄が非常に充実していました。

4. 「アジア・ラヤ」にかかわった徴用作家の「大東亜共栄圏文化」

次に、富沢有為男と浅野晃がジャワ侵攻当初に「大東亜共栄圏」、それとの関係における戦争および文学や文化についてどのように考え、それが「アジア・ラヤ」の刊行作業を中心としたジャワ滞在経験を通して何か変化が見られたのかを考察したいと思います。

(1) 富沢有為男（1902年～1970年、ジャワ滞在1942年3月～8月）

まず富沢ですが、彼は芥川賞作家にもかかわらず、戦後は病気がちで欧米の少年少女向

けの文学の翻訳を多く手掛けたことなどからも、戦時中の彼に関する研究はあまり行われていません。1902年に大分で生まれ、東京美術学校を中退します。1927年には絵画を学ぶために3年間フランスに留学し、その途中寄港したフランス植民地下のサイゴンで圧政に苦しむ人々を目の当たりにして、それは国民が徳性を欠いたために国家を失ったからだと考えました。フランスから帰国後は執筆活動が中心となり、1937年2月の論考「作家の位置と実践」では、作家の位置や態度は社会共有の徳性に依拠して初めて決まり、文学の方向性も定まると、作家と国民に共有される徳性を重視しますが、日中戦争勃発前ということもあり、時局と作家との関係には言及されていません。そして西洋の実証精神について触れて、それが人間性の没落の原因となったと懐疑の目を向けています。国民の徳性によって支えられるものであるとする彼の国家に対する考えは、1938年に政府が菊池寛を通して作家に要請した漢口攻略戦従軍への参加によって、先鋭化していきます。そこでの見聞を通して、論考「中支戦線」や「わが対支方策」では、日本は抗日精神を持った中国と闘っているが、実はその背後にいる東洋を植民地化しようとする西欧と闘っているのではとの考えに至り、中国との戦争を正当化します。そして一国の運命を支配するのは思想であり、それは言葉に含まれた感情や魂の高まりによって得られるものであると考え、言葉を重視し、中国の抗日精神と闘うためには、中国で日本語を教え、それによって日本と日本語を共有することが重要であると考えようになりました。ただし文学に関しては、戦争文学(素材派)のみならず、身辺文学(芸術派)であっても、それが国運を導く国民そのものの情熱と意志があれば名作となると論考「傾向文学小論」や『芸術論』において主張し、私小説などに対して寛大な立場を維持しています。その寛大な立場は、小説『東洋』を1939年に刊行した時に、それが当初総合雑誌に発表されたときに寄せられた素材派と芸術派双方からの論評、しかもその多くは批判的論評であったのにもかかわらず、それを文壇の縮図として「東洋評論抄」にまとめて収録したことに表れています。一方同年に創刊した『文芸日本』に翌年浅野晃等の国粹主義者の作家が参加し寄稿するようになり、彼らとの交流が密になっていきます。

そのような状況の中、1941年12月に陸軍による徴用によって宣伝班員としてジャワへ派遣されることとなります。そこでの滞在中の心境を、「大東亜戦で国家体制の肝が決まったのであるから、今度は個人が新たに国家と一体となって、現実を導いていくところまで行く」との考えにいたっていたことを、ジャワからの帰還後に発言しています。ジャワへ派遣されるまでの富沢の考えをまとめると、「大東亜戦争」は東洋を植民地化しようとする西洋との闘いであるとの認識を持ち、言語は一国の運命を支配すると考えたことから、「大東亜共栄圏」において日本語を共通語とすることの重要性を主張しました。ただし自分自身の立場である作家活動については、国運を導く国民そのものの情熱と意志があれば戦争文学(素材派)や身辺文学(芸術派)でも問題視する必要はないと考えていました。

その後の彼のジャワでの滞在は半年弱と決して長くはありませんでしたが、それは彼の考えを変えるのに十分でした。3月にインドネシアの文化人の前で行った講演でのインドネシア人の反応を知り、「アジア・ラヤ」の刊行を通して生身のインドネシア人と接して議論し、「大東亜戦争」は東洋を植民地化しようとする西洋との闘いであるという論理はインドネシア人には通用しないことを実感しました。日本への帰還後の1943年1月8日の「アジア・ラヤ」紙に掲載された彼の論考は、日本とインドネシアに共通するものは人間の持つ愛情であり、私はジャワ滞在中にインドネシアの人々と一緒になって当地(インドネシア)の文化の再興に努力したことを日本で伝える、という内容のものでした(ただし、それに先立って1月6日の『ジャワ新聞』に掲載された日本語の同文では、単に文化再興となっていて、日本や当地の文化再興とはなっていません)。日本への帰還後に執筆したり座談会で発言したりした内容は、「アジア・ラヤ」の名誉委員スカルジョが自分の意見を述べる時の眼光の鋭さに敬服したことであり、ジャワの人々は感受性が強く、頭脳の

働きも悪くない、非常に勤勉であることに感銘を受けたことでした。また、皇国史観に基づいて「大東亜共栄圏」における天皇による治世をインドネシアの人々に理解してもらうことの難しさを実感したエピソードも記しています。さらに、インドネシアの歴史・文化についても日本の読者に紹介しています。ただし、インドネシアの人々の日本語学習熱の高まりへの感動も記し、それは彼の自論である「大東亜共栄圏」における日本語の共通語化を主張しているとも考えられます。しかし、インドネシア語にどんどん日本語を注入していくと言った彼の当初の主張は見られず、また当時、実際多くのインドネシア人が熱心に日本語を学ぶ姿勢がみられたことも事実であり、この点は慎重に考察する必要があると思います。

そして、ジャワでの自分たちの活動に対する日本社会の関心が高かった帰還直後では、自分たちの活躍に関心が寄せられていたことを意識し、それに誇張を交えて応えた面もあったと考えられます。しかし、日本の敗戦色が日増しに深まりをみせていた1944年3月に、気心の知れた友人たちとの『文芸日本』での「大東亜文化建設を語る」と題した座談会では、出席者から本音が次々と語られました。富沢は、日本の大東亜共栄圏での日本人官吏の優秀さや組織力の優れていることを指摘して国家経営について意見は述べたのですが、文化政策には触れようとしませんでした。それは、ジャワでの経験によって、「大東亜共栄圏」の文化建設を語ることの難しさを身をもって感じていたからであると考えます。富沢有為男については戦時中国粹主義者であったと理解されていますが、戦時中の徴用経験から、その当時すでに文化的帝国主義の限界に気づいていたと考えられます。

（2）浅野晃（1901年～1990年、ジャワ滞在1942年3月～8月）

次に、浅野晃を取り上げたいと思います。戦時中の浅野晃に関する研究は、複数の研究者によって行われています。その主な論点は、彼が岡倉天心の『東洋の理想』で語られる「アジアは一つ」という思想はあくまで神話として語られたにもかかわらず、それを浅野は情勢論に読み替えて日本の南方侵略を肯定したこと、さらにジャワ滞在中にインドネシアの人々が懐いていた強い独立願望などの心情を理解できなかったため、さらに「アジア・ラヤ」に掲載された岡倉天心の『東洋の理想』のインドネシア語訳にインドネシアの人々が感銘を受けたことを見聞きしたことによって、日本帰還後に「アジアは一つ」であるとの主張を繰り返して日本「大東亜共栄圏」構想に一層加担するようになった、とするものです。しかし、「アジア・ラヤ」に掲載された彼の論考や『東洋の理想』の訳文にあると、彼の違った姿が見えてきます。その点をここでは明らかにしたいと思います。

浅野晃は1901年に滋賀県に生まれ、東京帝国大学法学部卒業します。1923年ごろからプロレタリアート運動に参加して共産党員となり、1928年の3.15事件で検挙されます。翌年コミンテルン傘下の日本共産党のテーゼである君主制の廃止は国情に合わないと考えて転向し、その後「日本浪漫派」の保田與重郎や芳賀檀から影響を受けます。彼は、1937年の『新潮』8月号に発表した「国民文学論の根本問題」によって文壇から注目を集めるようになります。そこで彼は、不朽性を持った文学とは民族のカオス(深淵)に根差したタイプ(英雄的人間像)を有していること、各民族は自国語をもってしかカオスとかかわれないこと、そして明治維新後、日本は西欧(寄生)文化の輸入によってカオスと交渉できなくなっていることを主張し、脚光を浴びます。この原稿は、日中全面戦争の火ぶたが切られた7月とほぼ同じ時期に書かれたと考えられますが、『新評論』の同年12月号に掲載された彼の論考「東洋の理想と現実」では、日本の帝国主義の一步前進は、西洋の帝国主義の一步後退であると主張し、日中戦争を肯定します。翌年1938年には富沢有為男も参加した漢口攻略戦従軍に参加しますが、彼は富沢と違って前線までは従軍していません。そして1939年に刊行した『岡倉天心論攷』「西洋と東洋」(序に代えて)において一この序は最初に『思想』(1938年10月号)に掲載されたもので、『岡倉天心論攷』が1989年に新装改訂版と

して刊行されたときに削除されますが一岡倉天心のアジア一体論を次のように説明します。天心のアジア一体論には、古きアジアの平和のイデーとアジアの単一の具体的表現としての日本のイデーの二つのイデーが基礎となっており、アジアにおいて国家を喪失しなかった日本が東洋の過去の精髓を継承し保持しているのであるから、生きた東洋は日本にのみある、という主張でした。ここに浅野晃の岡倉天心に対する独特の情勢論的解釈があり、また前述したようにすでに日本の帝国主義を肯定的にとらえ、さらに1940年に刊行した『明治の精神』で、明治の精神は、慶応3年の御沙汰書の「皇政復古」であり、諸事祭祀に始まって祭祀に終わる祭政一本の惟神の王道に復せられたことに示されると主張して、「大東亜戦争」を日本の天皇を頂点とした聖戦として肯定する考えに至りました。

彼の思考の軌跡を見てみると、議論が非常に観念的で矛盾点も見られます。観念的である点は、彼が本当に戦争を実体験したのは、ジャワ侵攻の時にオランダを中心とした連合軍とのジャワ沖海戦の時だけであったことによるのかもしれませんが、余談になりますが、その時受けた強い印象を後年「天と海」という詩集に収め、それが三島由紀夫に強い感銘を与えます。さて彼の思考に戻りますが、当初、各民族のカオス、それとかかわるための各民族の国語を認めていたのですが、次第に岡倉天心を情勢論的に解釈することによって国家を失っていない日本こそが過去の東洋の精髓を継承していると理解し、日本文化によって大東亜共栄圏を建設することを正当化していきます。アジアを一つにまとめるために日本の文化的帝国主義を肯定していたことが特徴として指摘できると考えます。

そして、1941年12月に浅野も陸軍へ徴用され、ジャワへ派遣されます。宣伝班員として、日本語の教科書の執筆や日本語学校の開設にかかわったりもしますが、「アジア・ラヤ」の刊行では、一緒に刊行にかかわったインドネシア人スタッフと熱心に議論をすることとなります。そして1942年5月11日の「アジア・ラヤ」に彼の「アジアは一つ」という題目の論考が掲載されます。これは日本語紙『うなばら』の5月14日・15日に掲載されたものが忠実に翻訳されて先行して「アジア・ラヤ」に掲載されたものです。そこで彼は、アジアは3000年の歴史において、日本を中心としてスメラミクニ（皇国）として一つであった、と主張します。しかし欧米の侵略によって分断されてしまっていたため、アジアが復興するためにはアジア本来の一体の回復が必要であり、日本こそがアジアの深い一体を守りつづけてきたのであり、したがって日本こそがアジアの光である、という内容でした。おそらく「スメラ学」塾の清水宣雄の主張の影響を受けつつ、先に明らかにした当時の彼の自論を記したものでしょう。

しかし浅野も「アジア・ラヤ」の刊行を通してインドネシアの知識人と接触し議論したことによって、自分の主張をインドネシア人が容易に受け入れてくれないことに気づくようになります。たとえば、日本の文化を理解してもらうためには本来「古事記」などの日本の古典文学がよいと考えていたのですが、それでは日本の文化をインドネシア人に伝えることは難しいとの考えに至ります。そこで、赤穂義士銘々伝や水戸黄門漫遊記などの侠客ものを翻訳して紹介したらよいと考え、日本から本を取り寄せ翻訳を進めようと思いましたが、彼が帰還したこともあり、それは実現しませんでした。また、8月に「アジア・ラヤ」に岡倉天心の『東洋の理想』の訳文が掲載されますが、同書に対する浅野の情勢論的解釈を披歴するためには、「日本はアジア文明の博物館である」との一文が含まれている冒頭の章「理想の領域」こそが掲載されるべきであったのですが、別の章が掲載されました。それは、現地には同書の原書である英語版しかなかったため英語に不得意な中谷に代わってインドネシアの作家が翻訳したものであり、題目が「仏教とインドの芸術：ダルマウィジャヤによる岡倉覚三の東洋の理想」とされていることから分かるように、『東洋の理想』の中の「仏教とインド芸術」の章が選ばれ、それが忠実に翻訳されたものでした。ダルマウィジャヤとは、アジア・ラヤの記者であったインドネシアの作家です。その章は、「日本は何世紀にわたってインドから離れていたが、古来より複数の思想の源であったその国に惹かれ、一層引き寄せられているのである」と締めくくられているのです。浅

野はその訳文について中谷から内容を聞かされ、「2、3の重要かつ機微な点に幾分嫌い欠陥がありはしたが、大体において天心の意志だけは誤りなく伝えられていると思われた」と日本帰還後に記しています。彼は自分の意図とは別の方向に天心の『東洋の理想』がインドネシア語に翻訳され紹介されたことを認識していたにもかかわらず、あたかもインドネシアの人々が『東洋の理想』に対する自分の情勢論的解釈へ感銘を受けたことがごとく日本社会に紹介し、「大東亜共栄圏」構想を提唱し続けました。

一方浅野は、インドネシア語の国語運動が民族運動と連携していること、また西欧の言葉が、その適切な訳語を考案することに苦心が払われつつ国語に組み入れられてきたことに対しても理解を示していくこととなります。「全マライ語族を言語的に結集すべき一つの標準マライ語を作り出してゆこうというのがインドネシア語の運動なのであり、この運動はインドネシア民族運動と表裏の関係で進んでいった」と記しています。また、バライ・プスタカのインドネシアのスタッフが鶏の密画に鶏冠から足に至る各部分の名称を何度も書いては消して相応な言葉を見つけようとしている姿を目にして、「明治初年の先覚者たちが泰西の学術語の類を国語に移す際に払われた苦心を想起して、言い知れず厳粛な気持ちになった」と記しています。

そして日本帰還後の1943年1月8日「アジア・ラヤ」に寄せた文章には、ジャワの人々に日本の文化や生活の最もよい部分を取り入れることを強く期待し、日本文化がジャワに吸収されることが大東亜共栄圏の内実を築いていくことに欠かせないと主張している一方で、2つの民族の間でもっともよい部分を交換し合うことによって相互理解や信頼感が深まり、お互いが尊敬しあうことを促進できると文章を締めくくっています（1943年1月6日の『ジャワ新聞』に掲載された日本語の文章は、「民族の持つ最も良いものを交換し合うことが、お互いの信頼と尊敬を深め、理解を早めることになる」となっています）。

確かに浅野晃は日本に帰還後も、岡倉天心の『東洋の理想』を情勢論的に解釈して日本社会に向けて提唱し続けます。しかし、彼も「アジアは一つ」のその一つを日本文化で一つにすることがインドネシアの人々に受け入れられないことをジャワ滞在中に実感せざるを得ませんでした。しかもその日本文化とは何かを、インドネシアでの体験以後は、「天皇」という存在以外には人々に明確に示すことができなくなっていました。それは、日本帰還後の1943年5月の『新潮』に発表した「戦争と文学者」で、今や皇国の戦い、聖戦の意味、そして皇軍の威儀が理解されるようになった、文学者の使命も、皇国の風雅の道徳を相承護持するところの皇国の文学者となることである、と、「皇国」を前面に出していることからうかがうことができます。そして、1944年3月の『文芸日本』の「大東亜の文化建設」と題した座談会で、浅野は「アジアは一つということを言うけれど、それはどういうことなのか我々にははっきりしない」と彼がジャワ滞在まえから懐いていた気持ちを述べ、また、大東亜宣言（1943年11月6日）のような抽象的ことを言うよりも、大東亜の皇紀を使うことの方がありがたい、と「大東亜共栄圏」の文化を具象的に表現することの重要性を主張しています。それは彼がインドネシアで「大東亜共栄圏」の文化を抽象的な理念でしか語ることができず、しかもそれは日本文化の押し付けであったため、インドネシアの人々に受け入れてもらうことに失敗したことを認識していたからだと考えられます。また、インドネシア滞在中に同地の人々の民族運動に対する思いに気づかざるを得なかったことは、1944年夏に、浅野より約2年半長くインドネシアに滞在していた徴用作家の武田麟太郎に、インドネシアの独立を認めるよう日本政府に働きかけをしようと誘われ、行動を共にしたことにも示されています。

浅野晃も、インドネシア人との議論を通して、日本文化とは何か、またそれを彼らに理解してもらうことの難しさを実感すると同時に、インドネシア人が自分たちの文化を誇りにして発展させていこうとしている努力に気づかざるを得なかったのです。その結果、国家を喪失しなかった日本が東洋の過去の精髓を継承し、保持しているとの認識に立って日本の文化を押し付けることは、彼らには受け入れられないことを認識し、日本文化の押し

付けに失敗したことを国内向けに糊塗するために、皇道において型と立ち振る舞い（威儀）の重要性を一層強調するようになったと理解できます。すなわちインドネシアでの滞在経験は現実への理解を促進するものであったこと、つまりインドネシアの人々の思いは確実に見えていたことは間違いないと思われます。そうであれば、言論統制の厳しい日本への帰還後に沈黙でもって日本政府の推し進める「大東亜戦争」に無言の抵抗を行う選択肢もあったはずですが、浅野はその見えたことに対して目を背ける、あるいは目をつぶってしまいました。なぜでしょうか。その理由はいくつか考えられますが、最大の理由は帝国主義国間の戦争において一旦その一員として戦う道が選ばれてしまった限り、その戦争から身を引くことは難しかったため、つまり帝国主義勢力の一員としての日本の国益に捉われてしまっていたため、ジャワの滞在で見えてきたものに目を閉じてしまったことではないかと考えます。

5. インドネシア人作家の「大東亜共栄圏文化」像

「アジア・ラヤ」文化部編集長サヌシ・パネ

では「アジア・ラヤ」において、インドネシア文化人にとっての「大東亜共栄圏」一彼らは「大アジア」との表現を使っていますが—そこにおける文化をどのように論じていたのか見ていきます。日本占領下のインドネシア人作家についての既存の研究は、日本軍の検閲によってインドネシア人作家は日本の宣伝工作に従って執筆活動を行ったとするものが中心で、彼らの主体性(エイジェンシー性)を重視したものもありますが、それが可能になった理由については深く考察されていません。

さて、文化部の編集長サヌシ・パネは、1905年にスマトラのエスニック・グループの一つバタック・マンダイリンとして生まれました。1925年に師範学校を卒業し、さらに1年間だけですが、インドネシア大学法学部の前身である法律高等学校（Rechtshogeschool）で哲学を勉強しています。当時のインドネシアではオランダ語で教育を受けたエリートでした。彼は、民族主義者スカルノと近い関係にあり、1927年には政治活動を理由に教職を解任されています。インドの文化に深い関心を寄せ、1929年～30年にインドに滞在してヒンドゥ文化を学び、またノーベル賞作家タゴールに深く心酔します。帰国後、詩人として名声を得、また華人系ムラユ語の雑誌の編集長を務めます。

1935年には、インドネシアの文化人の間で展開された「文化論争」に参加します。この文化論争は、第一次世界大戦や自然災害の影響によってインドネシア社会が1920年代に混乱・疲弊し共産党蜂起なども起こったことなどにより、オランダ植民地政府が1901年から行ってきた倫理政策を撤回し政治運動に対して強圧政策に転じたことなどが契機となって展開されます。西洋の植民地宗主国、その西洋文化に対する懐疑が、インドネシアの文化とは何か、東洋の文化とは何かとの問いを発することとなり、内面的思索を追及していくことにつながったのです。その論者の一人であったサヌシ・パネは、過去のインドネシアの列島において様々な王国があった時代にすでにインドネシアなるものは、アダット（慣習）や芸術に存在していたのであるが、インドネシアはまだ立ち現れていなかったため、インドネシア人は自分たちが同じ民族であることに気づいていなかったのである、と主張しました。

また、東洋では、人間は周りの自然世界と一体であると感じることに特徴があるとし、西洋がファウストのように肉体を重視し、東洋はアルジュナのように精神を重視するが、それを一体化することによって完全無欠となることができると主張しました。その後、1941年にバライ・プスタカの総合雑誌『パンジ・プスタカ』の編集長を務め、日本が軍政を敷くと、「アジア・ラヤ」の文化部編集長に就任しました。彼は7月3日にその文化部編集長の職を退くまで、同紙の記者であったダルマウィジャヤ（民族主義学校タマン・シスワの教師を経験）等と交代で文化欄の論考をほぼ毎日発表していきました。また編集長を

退いてからも、しばらくはしばしば文化に関する論考の発表を続けました。

「大アジア」に関連した論考の主な主張点

それでは、「アジア・ラヤ」において「大アジア」はどのように論じられたのでしょうか。それに関連した論考の主な主張点は3つあると思います。

第1に、先に述べました1935年の「文化論争」の自説を巧みに取り入れて、「大アジア」を論じたことです。創刊日の1942年4月29日付の「大アジアの文化」という論考では、次のような主張が展開されます。

大アジアの文化は既に存在している。西洋人は自然を征服すべき敵と捉えた結果、社会が混乱している。東洋の国々にはそれぞれの特徴があるが、人間を自然の一部と捉えるなどの点において一つ精神を共有している。その精神に基づいて、それぞれの特徴をより一つにしていきより豊かにすることが大切である。そして日本精神を保持しながら西洋の知識と技術を取り入れてきた日本が手本となる、というものです。また5月2日の「西洋精神、日本の闘魂と私たち」と題した論考では、西洋の合理主義は心の富よりも物をより尊ぶ物質主義をもたらした、と主張します。そして武士道を備えた日本は、西洋を模倣するだけでなく、その中から何を拒否し、何を必要とすべきか、よく理解しているので、インドネシアも日本に学ぼうと結びます。

「大アジアの文化は既に存在している」というフレーズは、1935年の「文化論争」において「インドネシアなるものは過去に既に存在していたが、まだそれが立ち現れていないだけである」とサヌシ・パネが主張した「インドネシア」を「大アジア」に置き換えたと解釈することができます。そして、人間は自然と一体であると考えた東洋は、精神を重視し、西洋の物質主義、主知主義、個人主義の良い部分を取り入れて、大インドネシアの基礎としていくべきであると「文化論争」で主張したことからも分かるように、「アジア・ラヤ」の論考が文化論争での主張と共通性を有していることは明らかです。また、5月2日の論考「自然と敵対するニヒリズム」では、社会秩序を否定するナチズムを批判したドイツ人の亡命作家によって書かれた書籍『ニヒリズムの革命』（1938年）を批判することによって日本と同盟を結んでいるドイツを表面上は擁護しているように見せかけます。しかし実際は、同書では西洋のエゴイズム、すなわち精神のニヒリズムに対する批判が欠けていると批判し、西洋の一員であるために精神のニヒリズムに与しているナチ・ドイツと同盟を結んでいる日本を婉曲に批判しました。

第2の主張は、大アジアを、その中の各民族は共通した精神を持っており、そして植民地主義から解放されたものとして前宗主国オランダに対置させ、そこではオランダが行ったような悪政（植民地支配）は行われるはずはないと主張したことです。そこには当然、軍政を敷いて植民地支配と同様のことを行っている日本を間接的に批判する意図が垣間見られます。

5月5日の「深い谷」では、オランダはインドネシアについての専門家の提言を受けてインドネシアを統治してきたが、インドネシアを搾取するばかりで両国の溝は深まるばかりであったが、その理由は両国の精神や文化が異なっているからであった、と分析します。しかし、大アジアにおいては、活力、精神、文化を同じくする民族と出会うことができる、と主張し、アジアの民族として精神を同じくする日本は、オランダの行ったような搾取はしないはずである、と実際はインドネシアを支配している日本を批判しています。

5月14日の「地方文化と大アジア」では、オランダは植民地インドネシアを分割統治する手段として地方文化を育成しようとしたが、その教育において知性が重視され精神を軽んじたために失敗した。しかし、植民主義から解放された大アジアにおいてはおのずと地方文化は育まれていくと主張します。すなわち、大アジアにおいて植民主義は存在しな

いはずである、と日本をけん制しています。

第3に、「アジア・ラヤ」刊行後1か月が経過すると、大アジアにおいても各民族は相互に文化や言葉を学ばないと誤解が生じる、とする論考が出てきます。5月28日の「日本語」では、文化とそれを具現化した言葉は時間をかけることによって初めて深く理解できる。私たちは日本とお互いの言葉と文化に注意深く向き合い、それらを相互に理解しあうことによって、誤解から免れることができる、との主張がなされます。5月21日の別のインドネシア人編集長による論考「誤解を避ける」では、日本人とインドネシア人は同じアジア人でも慣習が異なる。誤解を避けるためには、お互いの言葉を勉強すべきである、との意見が表明されますが、そこには日本が布告第1号で提示した同族同祖論よりも民族間の相違点が強調されています。

以上の論旨は、インドネシア独立宣言がなされた後に刊行された総合雑誌「Voice of Free Indonesia」にサヌシ・パネとダルマウィジャヤが記した論考と重なります。彼らは、日本は大アジアの文化として日本文化を強制したし、また日本は「大東亜共栄圏」文化をインドネシアに移植することに失敗したと、日本の占領下での文化政策を批判しています。ただし、大アジアの文化が提起されたことは、東洋文化について考える機会となった、とも記しています。

6. インドネシア人による

独自の活動への模索と日本側との主導権争い

サヌシ・パネが7月3日を最後に『アジア・ラヤ』の文化部編集長を退いた後は、文化に関する論考は徐々に少なくなっていく。それらは、バライ・プスタカの総合雑誌『パンジ・プスタカ』や新たに1943年1月に創刊されたグラビア誌『ジャワ・バル（新ジャワ）』に引き継がれていきますが、観念的な「大東亜共栄圏」の文化についての論考は1943年後半にはあまり見られなくなり、食糧増産や兵歩として戦いに加わることの素晴らしさなどのより具体的な内容を扱った記事が増えていきます。

その一方、サヌシ・パネは、民族主義者スカルノなどと協力して、インドネシア人によるインドネシア文化センター構想などを立ち上げ、その実現化を図ろうとします。しかし、文化活動の主導権を握りたい日本側との主導権争いが行われ、文化センター構想については、日本が主導権を握った啓民文化指導所という名称のセンターが1943年4月に設立されることとなります。新聞についても、1942年9月10日に「南方占領地域における日本語新聞、現地語新聞の指導方針大綱」が決定され、朝日新聞がジャワの新聞運営を統括することとなりますが、「アジア・ラヤ」においては、編集長に就任したスカルジョ・ウィルヨプラノトがより実権を握っていったと考えられます。

おわりに

以上の考察を通して、日本占領期初期の「アジア・ラヤ」に関係した人々が「大東亜共栄圏」の文化についてどのように向き合ったのか、次の3つの点が明らかになったと考えます。

第1に、「アジア・ラヤ」に関係した日本の文化人は日本の文化をインドネシアの作家たちに押し付けようとしたが、その過程で日本の文化とは何か、東洋の文化とは何かを考えざるをえなくなり、また、日本とインドネシアの文化の相違点や対等性を認めざるをえなくなりました。しかし、日本に戻ると、帝国主義国間の戦闘が続く中、東洋の文化の意味を深く追求するよりは日本文化を押し付けることに失敗した事実を糊塗する発言を国内では展開していくこととなります。

第2として、一方インドネシアの作家たちは、日本側の主張に適当に合わせながらも、独

立にあたっては、民族主義の基盤となるインドネシアの文化だけでなく、西洋であるオランダから独立するためには、東洋に属する民族として東洋の文化とは何かを考える必要性を感じていたため、「大東亜共栄圏」の文化に関する論考の執筆を与えられたチャンスとして、西洋文化の鏡としての東洋の文化について意見を表明する場として同日刊紙を利用していきました。その際、1935年にインドネシアの文化人の中で展開された「文化論争」で主張した自説を主張し、またその論考の中には、日本の徴用作家が考えていたものと重なり合う部分もありました。しかし、基本的には日本の文化を押し付けようとした日本人徴用作家とは積極的に東洋（大東亜共栄圏）文化を議論しようとはしなかったし、彼らの論考の中には日本の文化帝国主義を批判する内容も含まれていました。

第3に、以上のように日本とインドネシアの文化人双方の考えがかみ合わなかったことは、言葉の障壁、そして文化を抽象的に語り理解することの難しさも理由の一つとしてあげられますが、中谷義男という実直な通訳・翻訳者が存在していたことに鑑みると、それ以上にインドネシア側がエイジェンシーとして日本占領下で主体的に行動しようとしたことを示すものと言えましょう。また、それを可能にしたのは、占領期初期の日本政府および宣伝班の「大東亜共栄圏」の文化建設に関する方針の混迷、そして「アジア・ラヤ」にかかわった宣伝班文化人の富沢有為男や浅野晃が同紙の刊行作業を通して日本文化を強制することの難しさを実感し、さらにインドネシアの文化人が自分たちの文化に誇りを持っていることに気づかされ、自らの考えを変えざるをえなくなった状況に至っていた点などが指摘できます。

上田：非常に濃い内容で、本当に私自身も初めて知る事が多かったと思います。ありがとうございました。

参考文献

<主な第一次資料>

- ・文芸誌、総合雑誌『新潮』、『文芸日本』、『中央公論』、『東亜文化圏』、『インドネシア文学』『新評論』
- ・インドネシア語日刊紙 *Asia Raya*、*Pembangoen*
- ・インドネシア語総合雑誌 *Pandji Poesoetaka*
- ・英語総合雑誌 *Voice of Free Indonesia*
- ・明石陽至・石井均「解題」『大東亜建設審議会関係史料』（企画院、大東亜建設審議会編、1995.復刻版、龍溪書舎）
- ・『うなばら・赤道報壁新聞』（1993）、『ジャワ新聞』（2013~2015）（復刻版、龍溪書舎）
- ・インドネシア日本占領期史料フォーラム編(1991).『証言集 日本占領下のインドネシア』 龍溪書舎.
- ・浅野晃(1939). 『岡倉天心論攷』思潮社. 1989. 改訂版『岡倉天心論攷』永田書房.
 (1940). 『明治の精神』黄河書院
 (1944). 『ジャワ勘定餘話』白水社.
 (1944). 『遠征前夜』日本文林社
- ・富沢有為男(1939). 『東洋』につぼん書房
 (1943). 『ジャワ文化戦』日本文林社
 (1942). 『芸術論』平凡社
 (1944). 「光のジャワ」（木村一信編・解題『南方徴用作家叢書⑩ 富沢有為男』龍溪書舎、1996年所収）

- ・町田敬二(1967).『戦う文化部隊』原書房.
(1978).『ある軍人の紙碑』芙蓉書房.
- ・ジャワ新聞社(1944).『ジャワ年鑑』
- ・「清水齊談話 宣伝部回顧」、「中谷義男談話 軍政の思い出」(西嶋コレクション)
- ・Mihardja, Achdiat K. ed.(1948) *Polemik Kebudayaan*

<主な関連先行研究>

- ・朝日新聞「新聞と戦争」取材班(2008)『新聞と戦争』
- ・神谷忠孝(1983)「浅野晃論」『国文学 解釈と観賞』1983年8月.
(1984)「南方徴用作家」『北海道大学人文科学論集 20：5-31』1984-02-24
(<http://hdl.handle.net/2115/34367>) .
- ・河西晃祐 (2012) 『帝国日本の拡張と崩壊』法政大学出版局.
- ・倉沢愛子 (1992) 『日本占領下ジャワ農村の変容』草思社
- ・後藤乾一 (1993) 『火の海の墓標』時事通信社.
(1986) 『昭和期日本とインドネシア』勁草書房.
- ・カナヘレ、ジョージ S. (1977) 『日本軍政とインドネシア独立』後藤乾一、近藤正臣、白石愛子訳) 鳳出版.
- ・土屋健治(1994)『インドネシアー思想の系譜』勁草書房.
- ・西田勝 (2007) 『近代日本の戦争と文学』法政大学出版局
- ・波多野澄雄 (1996) 『太平洋戦争とアジア外交』東京大学出版会.
- ・松本和也 (2008) 「富沢有為男『東洋の場所、あるいは素材派・芸術派論争のゆくえ』」『文芸研究』165 文芸研究会2008.3
- ・三田總子(2010)「若き日の富沢有為男」(名古屋近代文学史研究会)
<http://www.geocities.jp/nkbk1970/work/mita/164-a.html>
- ・山本春樹(1981)「『インドネシア』の文化論的意味-1930年代の文化論争を通して」『南方文化』第8号.
(1983)「インドネシア精神の遍歴ーアリシャバナの戦記文化哲学をめぐってー」『南方文化』第10号.
- ・早稲田大学大隈記念社会科学研究所(1959)『インドネシアにおける日本軍政研究』
- ・Mark, Ehamn(2006) *Appealing to Asia: Nation, Culture, and the Problem of Imperial Modernity in Japanese-occupied Java, 1942-1945*. Ph.D. dissertation, Colombia University.
(2010) Intellectual life and the media. *The Encyclopedia of Indonesia in the Pacific War*. Peter Post etl. Edited. Leiden • Boston • London
- ・H.B. Jassin (1954) *Kesusasteraan Indonesia dimasa Djepang* . (Tjetakan Kedua) Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K.
(1966) *Kesusastrann Indonesia Modern Dalam Kritik dan Esei I*. Gunung Agung.
- ・Maman S. Mahayana(2013) “Japanese Occupation Government Policy in Indonesia on Culture and Literature: A Case Study of Asia Raya Newspaper (1942-1945)” *Humaniora* Volume 25, Nomor 2, Juni 2013.
- ・Rochmani Santoso(1969) *Jakarta Raja Pada Djaman Djepang 1942-1945* Skripsi FSUI
- ・St. Takdir Alisjahbana (1963) *Indonesian Language and Literature: Two Essays*. Cultural Report Series. No. 11 Yale University Southeast Asian Studies. New Haven.